

自律的英語学習の促進を目指して：2022 年度「名工大英語鍛錬道場」

吉川りさ・横越梓・石川有香

1. はじめに

名古屋工業大学の英語科目集団は、2021 年度より、院生と学部生を対象に、授業外においても継続的に英語学習に取り組められる環境を提供し、自律的英語学習の促進を目指すことを目的とした取り組みを行っている。具体的な活動内容としては、(1) 定期的な TOEIC IP テスト受験機会の提供と、(2) 希望者に対して e ラーニング教材「ぎゅっと e」のアカウント付与・運営管理である。2 年目となる 2022 年度では、2021 年度での活動内容を基に、前期と後期の 2 回に分けて、「名工大英語鍛錬道場」(以下、「鍛錬道場」) の名称下で上記活動を行った。本稿は、その実施状況についての報告である。

2. TOEIC IP 実施

本活動で管理運営する TOEIC IP テストは、鍛錬活動実施時期と連動して、受験時期を学期の終わり頃に 1 回ずつを目安とし、年度で 2～3 回実施している。鍛錬道場に参加申し込みを希望する学生は、継続して参加するというケースもあれば、新規での参加申し込みもある。また、3 章にて後述するが、本活動で使用する「ぎゅっと e」は学習レベルが 3 つに分かれているため、参加者全員をそれぞれの英語力に応じた学習コースへ振り分ける作業を行っている。継続参加者においては、同じコースを希望する者もいれば、別のコースを試したいという者もあり、参加者によって希望も異なる。このような背景から、開催する鍛錬道場ごとに一斉振り分けを行っている。そのため、毎回の鍛錬道場を開始する前の時点(前期道場開始分では昨年度末、後期道場開始分では前期道場終了時)における参加者の英語力の把握をすることが必要となるため、IP テストを複数回、年度内に実施している。学生側にとっても、年度に 2～3 回

の IP テスト実施期間があることで、公開試験と比べて金銭的な負担が少ない TOEIC IP の受験機会が得られるという点や、学習開始前後に TOEIC を受験する機会があることで、学習効果を自ら感じることができる点はメリットとなるろう。

今年度に入って実施した TOEIC IP テストは、計 2 回あった。一回目は、2022 年 8 月 8 日（月）～10 月 7 日（金）を申込・受験期間として実施したオンライン IP テストである。ここで得られたスコア（表 1 の「第 2 回実施分」に該当）は、2022 年度後期鍛錬活動における学習コース振り分け時の資料として、また、2022 年度前期分の鍛錬道場の学習効果の測定におけるデータとした。2 回目は、2023 年 2 月 1 日（水）～2 月 17 日（金）を申込期間とし、2 月 22 日（水）と 3 月 9 日（木）に対面式で IP テストの実施を行った。オンライン式から対面式への変更理由は、試験実施時における不正防止策としてであった。ここで得られたスコア（表 1 の「第 3 回実施分」に該当）は 2022 年度後期分の鍛錬道場の学習効果の測定におけるデータとして、また 2023 年度前期の鍛錬活動における学習コース振り分け時の資料とした。なお、2022 年度前期鍛錬活動の際の学習コース振り分け用の TOEIC IP スコアは、2021 年 12 月 13 日（月）から 2022 年 2 月 10 日（木）を申込・受験期間としてオンライン実施して得られたスコア（表 1 の「第 1 回実施分」に該当）を用いた⁽¹⁾。

TOEIC IP テストの受験案内は主に、学生掲示板や学生への声かけを通して行った。受験料は各学生が負担した（名古屋工業大学後援会加入の場合は、金額補助があった）。各回の受験者内訳と記述統計は表 1 に示す。

今年度は、開催形態が対面式とオンデマンド式で分かれた回があったものの、各回の受験者数に特段相違はなく、全ての回において、40 名弱の学生が利用していた。全回において受験者がいたことから、定期的な受験機会を設けたことには今年度においても意義があったと考えられる。

表1. TOEIC IPテスト受験者内訳と記述統計

学年・所属	第1回実施分			第2回実施分			第3回実施分		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
学部1年	7	595	66.49	1	620.00	-	0	-	-
学部2年	10	590.5	142.89	2	630.00	155.56	4	516.25	173.46
学部3年	7	632.14	120.97	11	610.00	136.82	9	516.11	112.55
学部4年	9	640	104.67	5	670.00	149.83	22	606.14	93.95
博士前期課程	5	568	63.21	18	657.50	126.70	2	590	7.07
博士後期課程	0	-	-	1	720	-	0	-	-
総受験者数	38	605.13	99.65	38	651.25	142.23	37	557.13	96.76

3. 鍛錬道場の実施手順

昨年度に引き続き、鍛錬道場で用いる教材は、広島市立大学で開発された eラーニング教材「ぎゅっと e」の「リスニング」と「文法問題」を使用した。教材の選択背景については、吉川・横越・石川（2022）を参照されたい。短期間で集中して英語学習に取り組むのが「ぎゅっと e」の最大の特徴でもあるため、今年度の鍛錬道場も、2022年4月～9月の期間で「2022前期 名工大英語鍛錬道場」（以下、「前期道場」）と、2022年10月～2022年2月の期間で「2022後期 名工大英語鍛錬道場」（以下、「後期道場」）の名称下で、年度2回に分けて実施した。

3.1 鍛錬道場への参加登録手順

両道場への参加申込案内は、TOEIC IP 受験案内と同様に、学生掲示板を利用した。また、周知を徹底すべく、鍛錬道場に関するチラシを作成し、新入生に対しては4月初旬の新入生ガイダンスにて、在学生に対しては英語科目の初回の授業にて配布を行った。参加登録手順に関しては、主に2021年度のものに倣い、Microsoft Forms への回答を求め、指定 Moodle へ自己登録するよう指示を行った。アカウント付与対象者は、前期道場では354名、後期道場では205名であった。前年度と同様に、Forms への回答が未完了の者や指定 Moodle への自己登録が未完了の者に対しては、個別に連絡を取り、対応を促した。指定の手続きを経たものに対してはアカウント付与を行ったものの、未対応者に対しては、後述するように、教材コース配属に必要な情報が得られないため、アカウント付与は行えなかった。

吉川他（2022）で詳述した通り、本活動の初年度となる昨年度の後期道場への参加募集を行った際には、前期道場からの継続参観者と新規参加者の2パターンが考えられたため、それぞれに登録窓口を設けて登録作業を行った。前期道場用の Moodle 内で後期道場への継続参加登録が行えるという点は、前期道場参加者にとって利便性が高いと感じたため、そのような設定を行ったものの、窓口が二つあることで、両 Forms への登録を行う学生がいたり、正しくない窓口から登録を行う学生がいたり、想定以上に登録作業が煩雑になった。この経験を踏まえ、今年度の後期道場では、前期道場の Moodle では後期道場の開催の旨と登録手順を示すのみにとどめ、学生掲示板で単一の Forms のリンクを

通して参加登録を行うこととした。結果として、登録手順に関する問い合わせ連絡もなく、作業も煩雑にならなかったため、簡潔化に成功したと感じている。

3.2 各道場参加学生の特徴と使用教材コースの振り分け手順

本節では、まず、道場参加学生に関する記述を Forms の回答結果をまとめながら行っていく。そして次に、各参加者に対して行った使用教材コースの振り分け手順について説明していく。

まず、今年度の鍛錬道場に参加した学生の特徴の把握と学習コース割り当てに必要な情報収集をすべく、参加募集時に用いた各 Forms において、TOEIC IP 受験の有無（受験有の場合はスコア報告を、未受験の場合は過去 2 年以内の TOEIC (IP) スコアの報告を、スコアが保有していない場合は自己申告の英語力の報告を求めた）や、道場参加理由（複数選択式アンケートを使用）などを尋ねた。また、本 Form への回答内容も含め、道場参加過程で蓄積されるデータは匿名管理の上、英語教育の改善に活用される旨を告知し、全員から同意回答を得た。各道場参加理由をまとめた結果は、図 1・図 2 にそれぞれ示す。

まず図 1 から見てとれるように、前期道場への参加者は、就職活動時や進学時といった将来を見据えた学生が多く、前年度と同様の傾向であった。前年度は、オンライン学習の利便性が参加のきっかけとなった学生も多かったが、今年度は英語外部試験対策に向けた教材として認識している学生が多いことがわかる。また「英語が好き」と認識している参加者は 8%と非常に

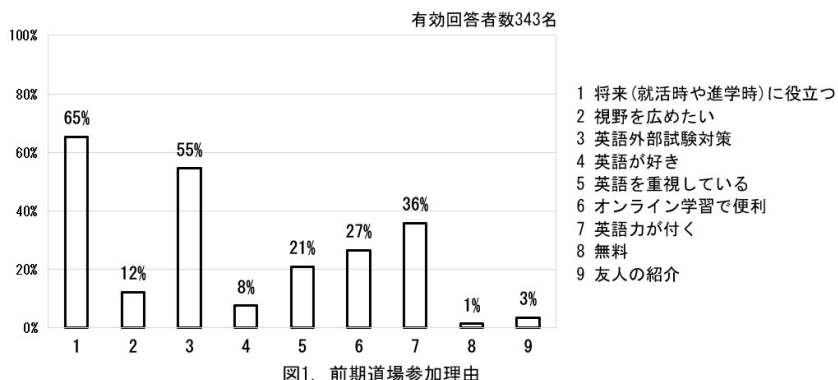
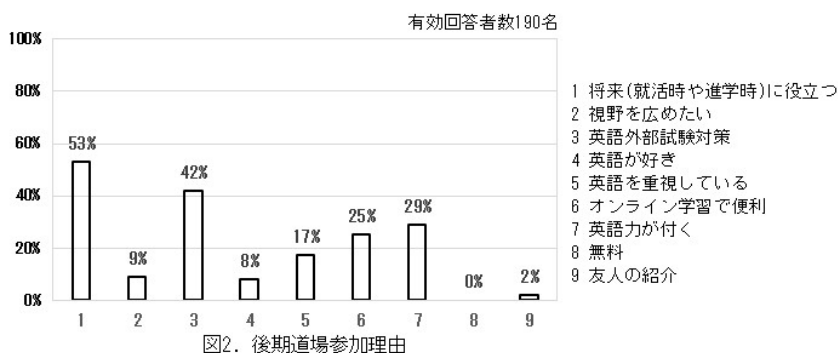


図1. 前期道場参加理由

低い割合であったことから、道場参加のきっかけは、学生の内発的動機より、外発的動機によるものであると考えられる。

図2で示す後期道場への参加者の特徴は、図1で示す前期道場への参加者の特徴と同じであった。後期道場の参加者のうち前期道場からの継続者は、205名のうち95名(46.34%)であり、後期道場への参加目的が前期道場への参加目的から変化したか否かについては調べていないため、継続者の影響がどの程度のものかは不明ではある。ただ、回答結果が前期の結果と特異的な相違は見られないため、過半数を占める新規登録者も外発的動機づけにより参加登録につながったものと考えてもよいであろう。



次に、使用教材コースの振り分け手順について説明するが、主に吉川他(2022)で詳述した昨年度の手順に倣って行った。個々に異なる参加学生の英語力に即したコースを提供できるよう、今年度も「ぎゅっと e」の「リスニング」教材に設けられている3つのレベルコース(初級・中級・上級)の全てを利用することとし、Forms 回答から得られた TOEIC (IP) テストスコア、もしくは自己申告の英語力に基づいて、最も適切な学習コースへの振り分けを行

表2. 学年別使用教材コース振り分け結果(前期道場)

教材レベル	学年						総数
	学部1年	学部2年	学部3年	学部4年	博士前期課程	博士後期課程	
初級	9	5	2	1	5	2	24
中級	53	23	44	35	29	1	185
上級	20	24	27	31	40	3	145
総数	82	52	73	67	74	6	354

った。前期道場のコース振り分けの結果は表 2 で、後期道場の結果は表 3 で示す。

両道場ともに上記の手続きを経た後は、北辰映電株式会社（以下、「北辰映電」）に、教材コースのアカウント付与登録作業を依頼した。期限を過ぎた参加申込の問い合わせが一定期間続いたこともあり、登録作業の依頼は複数回を要した。

表3. 学年別使用教材コース振り分け結果（後期道場）

教材レベル	学年						総数
	学部1年	学部2年	学部3年	学部4年	博士前期課程	博士後期課程	
初級	4	2	11	3	1	2	23
中級	15	10	54	13	8	3	103
上級	12	8	25	14	18	2	79
総数	31	20	90	30	27	7	205

3.3 Moodle の設定手順と学習支援

Moodle の設定手順も、昨年度に倣い、初級コースは A クラス、中級コースは B クラス、上級コースは C クラスとし、Moodle 上に「A クラス」、「B クラス」、「C クラス」の 3 つのトピックを作成し、学習に必要な関連ファイルをアップロードした（学生画面からは、自身のクラス名が示されたトピックのみ表示されるよう設定した）。クラスごとに、「ぎゅっと e」のログインに必要な情報や手順、FAQ 集 (<https://gyuto-e.jp/document/faq/>)、北辰映電が公開している学習案内資料などを事前にアップロードし、学習開始前に参加者自身で「ぎゅっと e」の学習内容とログイン方法などが確認できるようにし、予測される問い合わせを減らすよう準備した。

3.3.1 学習開始前の学習支援

昨年度に引き続き、クラスごとに週単位の取り組み速度目安を作成し、上記した事前アップロードファイルに含めた（前期道場分は図 3～図 5 に、後期道場分は図 6～図 8 にそれぞれ示す）。取り組み速度目安の作成においても、学期期間中に鍛錬道場を実施する上で参加学生にかかり得る負担を考慮し、中間・期末試験にあたる期間は「遅れ解消期間」とし、その週までに未完了の課題への取り組みや復習に充てる期間を設けることとした。取り組み期間は、前期は 8 月初旬に、後期は 2 月初旬に設定した。ただしこの目安は、参加者のモチベ

	期間	Listening	Grammar
1	4/25~5/1	001-062	001-057
2	5/2~5/8	063-124	058-114
3	5/9~5/15	125-186	115-171
4	5/16~5/22	187-248	172-228
5	5/23~5/29	249-310	229-285
6	5/30~6/5	遅れ解消期間	
7	6/6~6/12	311-372	286-342
8	6/13~6/19	373-434	343-399
9	6/20~6/26	435-496	400-456
10	6/27~7/3	497-557	457-513
11	7/4~7/10	558-620	514-570
12	7/11~7/17	遅れ解消期間	
13	7/18~7/24	621-680	571-627
14	7/25~7/31	681-740	628-684
15	8/1~8/7	741-800	685-740
16	8/8~8/14	遅れ解消期間	
17	8/15~9/30	総復習	

図3. Aクラス（初級）の取り組み速度目安（前期）

	期間	Listening	Grammar
1	4/25~5/1	001-054	001-057
2	5/2~5/8	055-108	058-114
3	5/9~5/15	109-162	115-171
4	5/16~5/22	163-220	172-228
5	5/23~5/29	221-275	229-285
6	5/30~6/5	遅れ解消期間	
7	6/6~6/12	276-328	286-342
8	6/13~6/19	329-382	343-399
9	6/20~6/26	383-436	400-456
10	6/27~7/3	437-496	457-513
11	7/4~7/10	497-550	514-570
12	7/11~7/17	遅れ解消期間	
13	7/18~7/24	551-604	571-627
14	7/25~7/31	605-658	628-684
15	8/1~8/7	659-720	685-740
16	8/8~8/14	遅れ解消期間	
17	8/15~9/30	総復習	

図5. Cクラス（上級）の取り組み速度目安（前期）

	期間	Listening	Grammar
1	10/17~10/23	001-060	001-060
2	10/24~10/30	061-120	061-121
3	10/31~11/6	121-180	122-182
4	11/7~11/13	181-240	183-243
5	11/14~11/20	241-300	244-304
6	11/21~11/27	301-360	305-365
7	11/28~12/4	遅れ解消期間	
8	12/5~12/11	361-420	366-426
9	12/12~12/18	421-480	427-487
10	12/19~12/25	481-540	488-548
11	12/26~1/8	遅れ解消期間	
13	1/9~1/15	541-600	549-609
14	1/16~1/22	601-660	610-670
15	1/23~1/29	661-726	671-731
16	1/30~2/5	727-800	732-740
17	2/6~3/31	総復習	

図7. Bクラス（中級）の取り組み速度目安（後期）

	期間	Listening	Grammar
1	4/25~5/1	001-062	001-057
2	5/2~5/8	063-124	058-114
3	5/9~5/15	125-186	115-171
4	5/16~5/22	187-248	172-228
5	5/23~5/29	249-310	229-285
6	5/30~6/5	遅れ解消期間	
7	6/6~6/12	311-372	286-342
8	6/13~6/19	373-434	343-399
9	6/20~6/26	435-496	400-456
10	6/27~7/3	497-558	457-513
11	7/4~7/10	559-620	514-570
12	7/11~7/17	遅れ解消期間	
13	7/18~7/24	621-680	571-627
14	7/25~7/31	681-740	628-684
15	8/1~8/7	741-800	685-740
16	8/8~8/14	遅れ解消期間	
17	8/15~9/30	総復習	

図4. Bクラス（中級）の取り組み速度目安（前期）

	期間	Listening	Grammar
1	10/17~10/23	001-060	001-060
2	10/24~10/30	061-120	061-121
3	10/31~11/6	121-180	122-182
4	11/7~11/13	181-240	183-243
5	11/14~11/20	241-300	244-304
6	11/21~11/27	301-360	305-365
7	11/28~12/4	遅れ解消期間	
8	12/5~12/11	361-420	366-426
9	12/12~12/18	421-480	427-487
10	12/19~12/25	481-540	488-548
11	12/26~1/8	遅れ解消期間	
13	1/9~1/15	541-600	549-609
14	1/16~1/22	601-660	610-670
15	1/23~1/29	661-726	671-731
16	1/30~2/5	727-800	732-740
17	2/6~3/31	総復習	

図6. Aクラス（初級）の取り組み速度目安（後期）

	期間	Listening	Grammar
1	10/17~10/23	001-054	001-060
2	10/24~10/30	055-108	061-121
3	10/31~11/6	109-162	122-182
4	11/7~11/13	163-220	183-243
5	11/14~11/20	221-274	244-304
6	11/21~11/27	275-328	305-365
7	11/28~12/4	遅れ解消期間	
8	12/5~12/11	329-388	366-426
9	12/12~12/18	389-442	427-487
10	12/19~12/25	443-496	488-548
11	12/26~1/8	遅れ解消期間	
13	1/9~1/15	497-550	549-609
14	1/16~1/22	551-604	610-670
15	1/23~1/29	605-658	671-731
16	1/30~2/5	659-720	732-740
17	2/6~3/31	総復習	

図8. Cクラス（上級）の取り組み速度目安（後期）

ーションを維持させる一つの方法であるという認識に基づいて管理側が設定しているものであるため、必ずこの目安で進まないといけない、というものではないことを Moodle 上で説明を加えた。そして、各週の課題量が少ないと感じた場合は自分のペースで先に進めること、そして継続した英語学習が続けられるよう計画的な学習計画を立てることを勧めた。

3.3.2 鍛錬道場実施期間中の学習支援

本節では、教材アカウント付与が終了し、参加者に開始通知を出した後の学習支援について、前年度の 21 年度に行った介入と比較をしながら報告を行う。21 年度は初年度ということもあり、どのような介入支援が有効であるかが明確ではなかった。そのため、利用可能な機能はできる限り行う、という半ば手探りで複数の方法を用いて介入を行った（参照：吉川他，2022）。その結果、毎週にかかる実務的負担は相当なものであり、次年度以降においても安定して継続できる内容ではなかったこともあり、管理負担に見合う支援策を見出すことが必要であった。そのような背景から、今年度はあえて介入支援を行わずに、鍛錬道場終了時のアンケートから得られる参加者の反応を探ることとした。ただ、参加者間のコミュニケーションの場は確保すべく、各鍛錬道場の Moodle コース上に同じコースに配属された者同士が Moodle 上で自由なやりとりができる「交流の場」トピックは設けた。また、「アンケート」機能を用いて、学部や学年、参加目的などの質問項目を設け、その回答内容を公開設定にし、鍛錬道場に、どのような人たちが集まっているかを互いに把握できるような環境を整えた。

4. 2022 年度実施分の鍛錬道場の取り組み状況

本章ではまず、2022 年度の前期と後期に行った各鍛錬道場での参加者の取り組み状況を、実施期間中に得られた複数のデータの整理を行いながら報告する。章の後半では、「ぎゅっと e」学習開始前後の TOEIC (IP) スコアの比較を通して、学習効果を検討することとしたい。

4.1 鍛錬道場参加者の「ぎゅっと e」取り組み状況

まず、週ごとのログイン回数の結果を示す。週単位の取り組み速度目安（前

期道場に関しては図 3～図 5、後期道場に関しては図 6～図 9)のうち、前期においては第 1 週～16 週目までの期間で、後期においては第 1 週～17 週目までの期間で、参加者がログインした回数を 6 つ (1～2 回、3～4 回、5～9 回、10～24 回以上、25 回以上) に分類し、各週でのログイン頻度を可視化した (図 9・図 10)。該当週にログインをしなかった参加者は図には含めていない点は留意されたい。参考までに、ある週で一度もログインをしていないという学生の全体平均は、前期では 281 名 ($SD = 48.27$) であり、全体の 79.38% を占めていた。この傾向は後期においても同様であり、週に 1 度もログインをしていない学生の全体平均は 161 名 ($SD = 25.20$) であり、全体の 78.54% を占めていた。1 週間で一度もログインをしない、つまり該当週の取り組みは未学習である、という学生が毎週高い割合で存在していたという点は、教員による何らかの定期的な指導介入が重要となる可能性が考えられる。

その他に、前期道場への参加者数が後期道場よりも多かったことが起因してか、図 9 の前期道場参加者の週ごとのログイン数が図 10 と比べて相対的に多かった。ただ、前後期ともに見られた特徴は、第 1 週目は、ログイン頻度にかかわらず最も学生がアクセスした回数が多く、その後は安定して、週に「1～2 回」、「5～9 回」の頻度でログインした学生が多かった点である。

次に、図 3～図 9 で示した、週ごとの取り組み速度目安の到達状況に応じて、参加者を「目安通り」、「目安 75～99% 達成」、「目安 51～74% 達成」、「目安 26～50% 達成」、「目安 1～25% 達成」、「未学習」の 6 つに細分し、それぞれの目安達成度合いにどれほどの参加者が占めているかを表 4 でまとめた。また、目安として設定した学習週ごとの達成度合いを、教材ごとに図 11～14 で図示した (前期道場においては、図 11 と図 12 に、後期道場においては、図 13 と図 14 に、順に示す)。ただし、未取り組み者については図に含めていない。

該当図をみると、前後期道場ともに、あらかじめ管理側が設定した取り組み目安の 25% までしか到達していない学生が最も多く、その傾向は右肩上がりで見えているのが見て取れる。次いで相対的に多い群は、26%～50% 達成した群であり、この傾向も学期間、および教材間で共通していた。一方、目安の 7 割以上の学習に取り組んだ学生は、全体のうちのわずかに過ぎず、これらの傾向も学期・教材間で共通していた。前年度では、「遅れ解消期間」として設定した週では、未取り組み分の学習遅れを挽回した結果、目安到達率が上がるといった、いわゆる「駆け込み学習」の傾向が見られたが、今年度においては、前

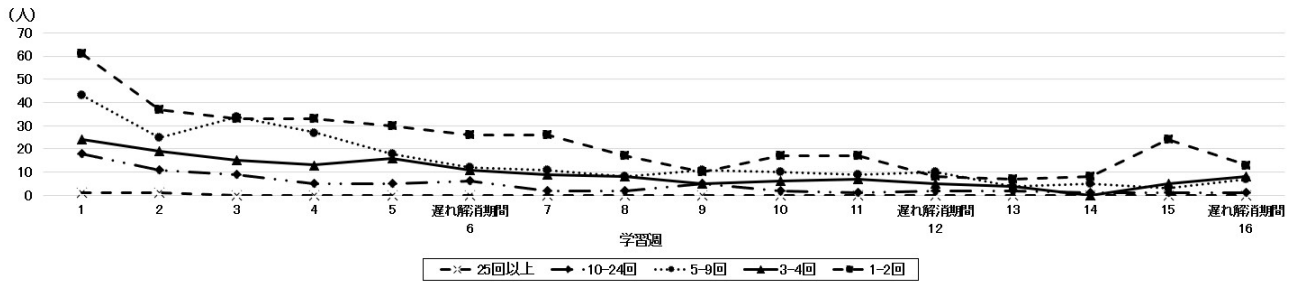


図9. 前期道場参加者間の週ごとのログイン回数

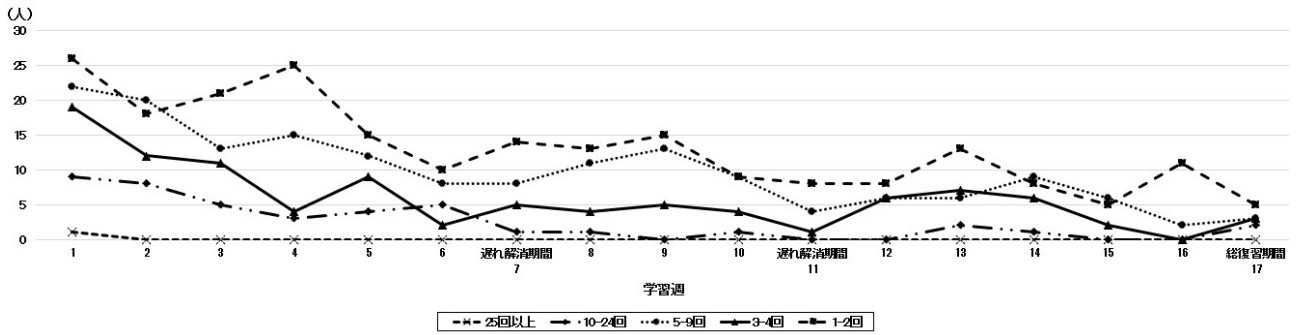


図10. 後期道場参加者間の週ごとのログイン回数

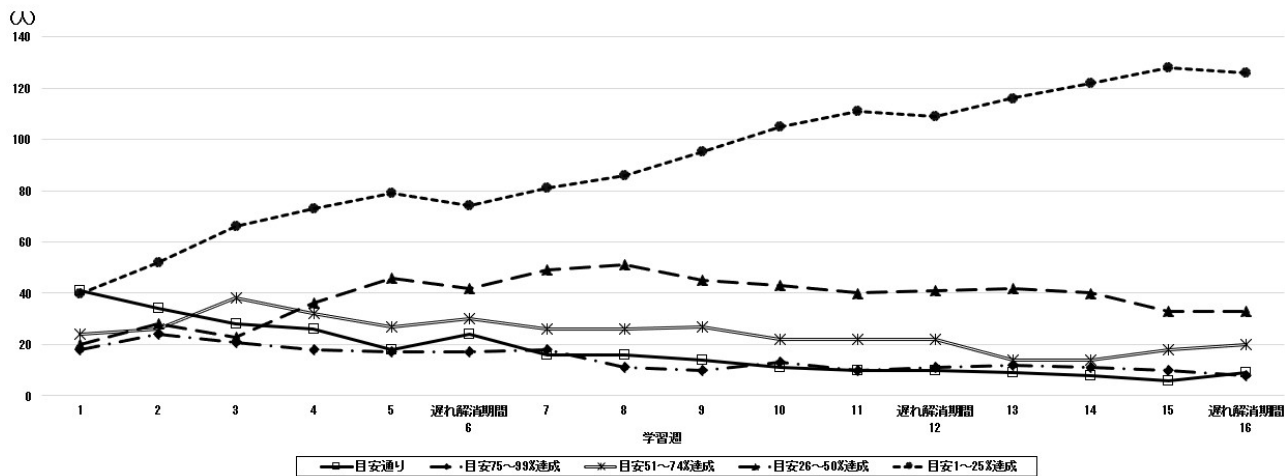


図1. 週ごとの「リスニング」教材の取り組み速度目安到達状況(前期道場参加者間)

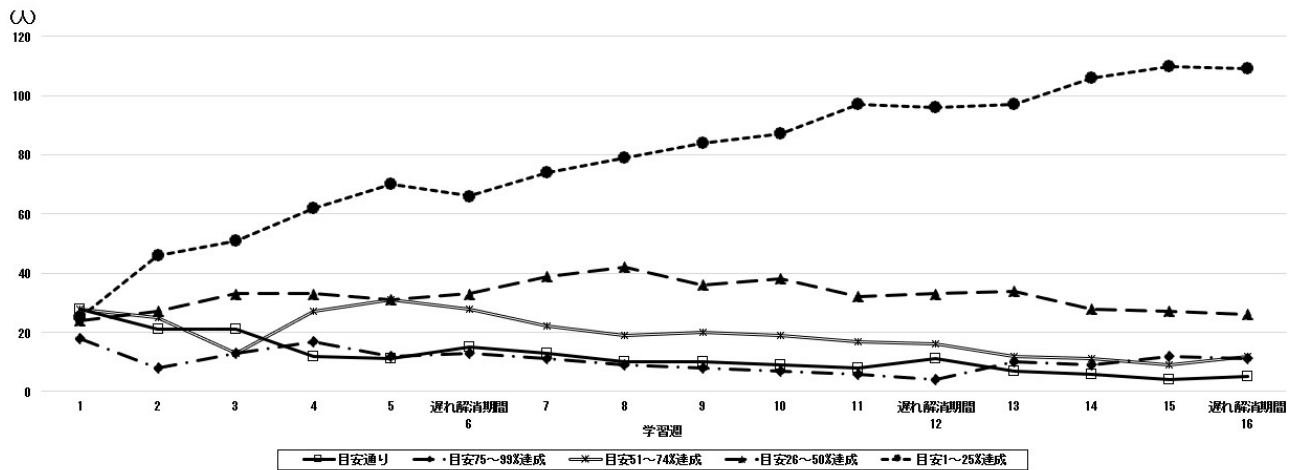


図2. 週ごとの「文法問題」教材の取り組み速度目安到達状況(前期道場参加者間)

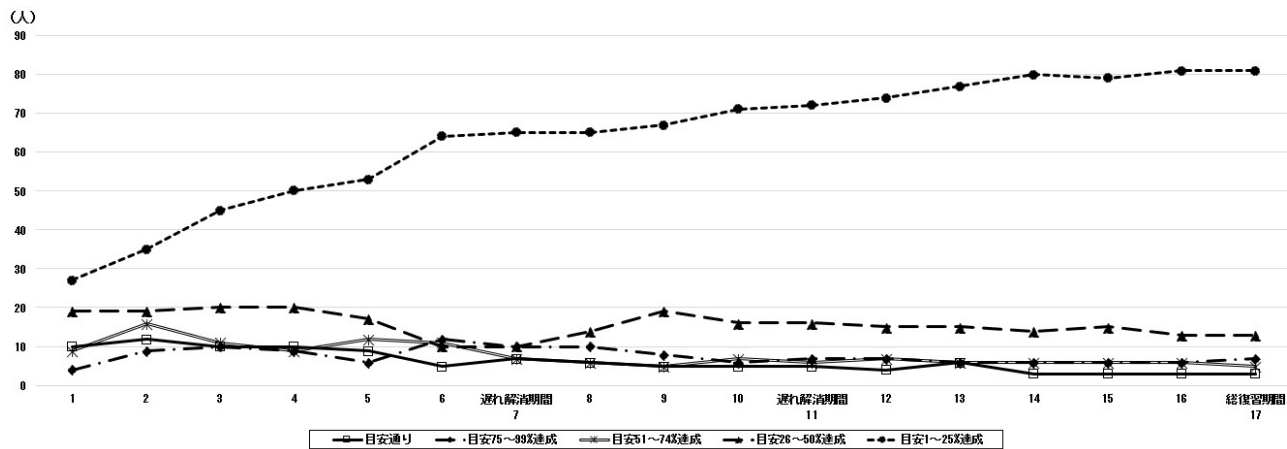


図13. 週ごとの「リスニング」教材の取り組み速度目安到達状況(後期道場参加者間)

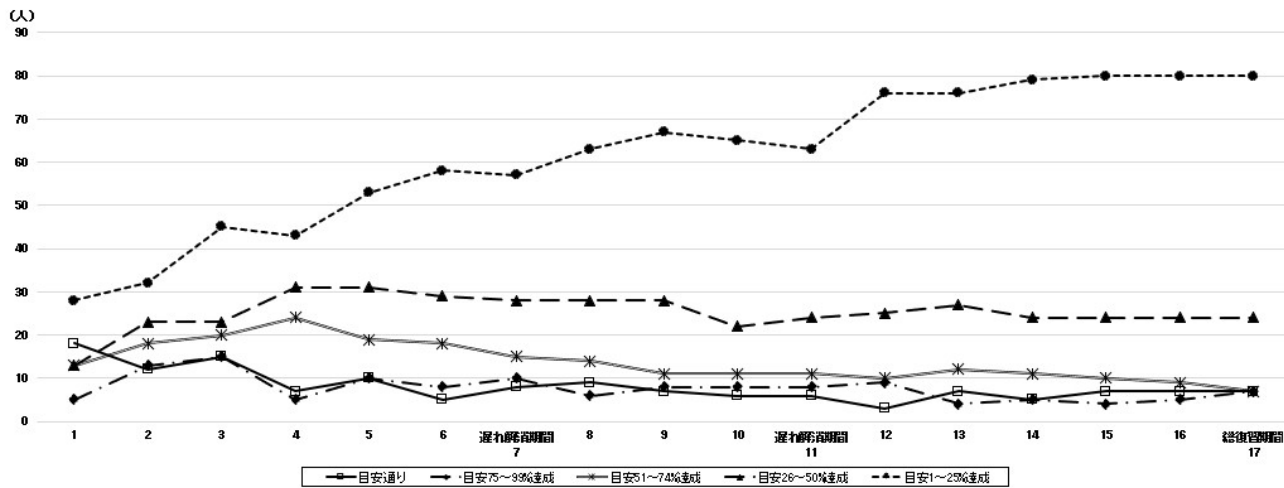


図14. 週ごとの「文法問題」教材の取り組み達成目安到達状況(後期道場参加者間)

表 4. 前後期道場における取り組み速度目安の到達状況の割合

	前期道場		後期道場	
	リスニング	文法問題	リスニング	文法問題
目安通り	4.94	3.37	2.93	4.39
目安 75～99%達成	4.04	2.97	3.67	3.69
目安 51～74%達成	6.85	5.46	3.53	5.64
目安 26～50%達成	10.81	9.11	7.39	11.76
目安 1～25%達成	25.83	22.23	32.75	32.29
未学習	47.46	56.50	50.10	41.18

期の「文法問題」教材への取り組み対してのみ、そのような傾向があるようである。

今年度は、初年度の経験や取り組みを踏まえ、鍛錬道場開始から終了までの学習期間中における指導的介入はほとんど行わない環境で実施をした。本学生に対して実施する鍛錬道場のような自由参加型の授業外英語学習の場を提供する上で、教員の介入有無により、どの程度、参加者の学習に取り組む意識が変容するか、については不明確なことは多く、改善策や結論を導き出すことは容易ではないと認識している。しかしながら、鍛錬道場に自らの意思で参加申し込みをしても、アクセス可能期間に1度もログインをしないという学生が多数いる、ログインはしていても設定していた目安に到達していない、あるいは、目安到達度が非常に低い学生が多数を占めている、という実態を、ログイン回数や取り組み状況に関するデータ整理を通して今回知り得ることができたことから、参加者の鍛錬学習に対する動機を何らかの方法で維持させることができるような介入は少なからず必要かもしれないと感じている。次節では、鍛錬道場終了後に実施したアンケート回答の集計を通して、現時点で考え得る介入の方法や、その課題点について考察し、次年度に向けた改善策を検討することとする。

4.2 鍛錬道場事後アンケート結果と今後の対応方針

前後期ともに、あらかじめ設定した取り組み目安期間が過ぎた頃に、事後アンケートを実施し、参加者各自で振り返りをしてもらった。本節では、そのア

ンケートから得られた参加者の反応をまとめながら、今後の指導的介入の在り方について検討を行っていく。

アンケートは、前後期ともに共通して使用できる項目を作成し、Moodle 上で参加者に回答を求めた。本論では、リッカート尺度で回答を求めた 5 項目と、自由記述型で回答を求めた 2 項目のアンケート項目に対する結果を報告する。リッカート尺度 5 項目は表 5 に、各回答形式とそれに対する回答結果をまとめたものを表 6 に示す。自由記述型で回答を求めた 2 項目には、「今期の鍛錬学習について良かったと思う点を書いてください」、「今期の鍛錬学習について悪かった（直してほしい）と思うことを書いてください」を設定した。アンケート回答者数とアンケート有効回答率については、前期道場に関しては順に 49 名、13.84%であり、後期道場に関しては、順に 20 名、9.76%であった。

表 6 を見ると、前後期道場ともに、回答者の 6 割程度が鍛錬道場に「満足していた」一方、回答者の 2 割以下は「不満」と感じていたと回答していた。配属コースや学習量・期間に関しても、過半数を超える回答者が「適切であった」と回答していたのに加えて、回答者の約 8 割が、後続する鍛錬道場への継続意思を示していたことから、有効回答率は低いため全参加者の振り返りを示したのではないにせよ、鍛錬道場での学習経験は彼らにとってポジティブなものであると考えられる結果が得られた。

表 5. 前・後期道場実施後に実施したリッカート尺度による 5 項目

1	今期の鍛錬学習に対する満足度を教えてください	表 6 の「満足度」に該当 ください
2	学習コースのレベルは自身の英語力に合っていましたか	表 6 の「配属コースレベル の適切さ」に該当
3	学習量は適切でしたか	表 6 の「学習量」に該当
4	目安設定した学習期間は適切でしたか	表 6 の「学習期間」に該当
5	鍛錬学習は、継続的に取り組みましたか	表 6 の「継続度」に該当
6	前期：後期も英語鍛錬道場に参加する予定 ですか 後期：今後も英語鍛錬道場がある場合、参 加する予定ですか	表 6 の「継続意思」に該当

表 6. リッカート尺度項目の回答結果

		前期(<i>n</i> =49)	後期(<i>n</i> =20)
満足度	とても満足している	20.41%	10.00%
	満足している	40.82%	50.00%
	どちらとも言えない	34.69%	25.00%
	不満である	4.08%	10.00%
	とても不満である	0.00%	5.00%
配属コース レベルの適 切さ	とても易しすぎた	2.04%	0.00%
	易しかった	12.24%	0.00%
	適切だった	71.43%	85.00%
	難しかった	8.16%	0.00%
	とても難しすぎた	0.00%	0.00%
	どちらとも言えない	6.12%	20.00%
学習量	とても多かった	2.04%	0.00%
	多かった	22.45%	15.00%
	適切だった	53.06%	60.00%
	少なかった	10.20%	0.00%
	とても少なかった	4.08%	5.00%
	どちらとも言えない	8.16%	20.00%
学習期間	とても長かった	0.00%	0.00%
	長かった	0.00%	15.00%
	適切だった	69.39%	60.00%
	短かった	6.12%	0.00%
	とても短かった	6.12%	5.00%
	どちらとも言えない	18.37%	20.00%
継続度	継続的に取り組めた	8.16%	5.00%
	ある程度継続的に取り組めた	22.45%	35.00%
	あまり継続的に取り組めなかった	34.69%	40.00%
	継続的に取り組めなかった	34.69%	20.00%
継続意思	はい	79.59%	75.00%
	いいえ	20.41%	25.00%

次に、自由記述式アンケートの集計結果を記す。集計に際して、ユーザーローカル AI テキストマイニングによる分析 (<https://textmining.userlocal.jp/>) を行った。この分析ツールでは、分析に含めたテキスト文書の中でその単語がどれだけ特徴的であるかを表す「スコア」が産出される。両道場について良かったと思う点について得られた回答結果は、図 15 で示し、悪かったと思う点についてまとめた集計結果は図 16 で示す。

まず、図 15 で示した結果について、算出スコアが最も高かった名詞は、「リスニング」(スコア 55.75、出現頻度 16) であり、「学習」(スコア 10.11、出現頻度 10)、「グラマー」(スコア 6.61、出現頻度 2)、「単語力」(スコア 4.89、出現頻度 1) であった。動詞や形容詞のスコアにおいては、名詞ほど顕著に高いスコアを示す単語の数は少なかったものの、「取り組める」(スコア 18.77、出現頻度 5)、「取り組みやすい」(スコア 4.89、出現頻度 1) など、鍛錬活動への関与に関連する語のスコアが比較的に高かった。

上記のスコアが高かった語句が使用されていた具体的な回答として、まず「リスニング」については、「リスニングの勉強ができる教材を持っていなかったのも、特にリスニングの練習ができたのが良かった」、「リスニングの問題がネット上でできてありがたかった」、「リスニングで本番と違い先に問題文が読めないで、しっかり内容を聞く必要がある点」など、リスニングの学習ができたことに対してポジティブな回答が多く見られた (13 件)。また、「学習」については、「レベルに合わせた学習ができる点」、「計画の予定表があったので、自分の学習計画の基準にすることができました」、「大学内だけでなく、通学時間を使った学習ができたので、習慣化しやすかった」、「隙間時間に問題を解けるので、継続して英語学習が出来た」など、学習環境や学習方法に関する回答で占められていた (7 件)。上記以外にも、「少し曖昧な冠詞や単数複数の学び直しができてよかった」、「当たっていても解説を見て新たに知ることや忘れていたことを思い出すことができました。また、自分の選んだ答えが違う理由をしっかりと知ることができました」、「文法問題の解説が細かく書かれている点」などのように、使用教材に対して肯定的な意見が多く見られるほか、「英語に対して多少でも意識を向けられた」、「英語力を持続し続けるのに役立つと感じた。普段英語に触れることが少ない人に特に役立つと感じた」、「英語に触れる時間が増えた」など、英語学習に対する意識や態度の変化を窺わせるような意見も見られた。さらに、「学習の目安を示していただいた点良かった」、

「計画の予定表があったので、自分の学習計画の基準にすることができた」、など、取り組み速度の目安があることが計画的な学習につながる可能性を示す意見も見られたことから、目安設定とその提示は有効な支援策の一つとして捉えることができよう。

続いて、図 16 の、各道場について悪かった（直してほしい）と思う点についてまとめた結果を報告する。まず、算出スコアが最も高かった名詞は、「reading」（スコア 8.93、出現頻度 2）であり、「vocabulary」（スコア 7.65、出現頻度 1）、「グラマー」（スコア 6.61、出現頻度 2）、「part6」（スコア 5.36、出現頻度 1）と続いた。動詞や形容詞のスコアについては、名詞ほど高いスコアではなかったものの、「取り組める」（スコア 5.17、出現頻度 2）、「易しい」（スコア 1.79、出現頻度 1）がそれぞれの上位であった。「reading」や「vocabulary」、「part6」を含めた具体的な回答には、長文内容理解を問うような教材を希望する意見やユーザーインターフェースに関する改善希望を求める意見が大半を占めていた。

上記以外には、鍛錬道場の実施時期を学期開始時期とできる限り近づけてほしい、という意見もあれば、夏季休暇中の実施を希望する意見も見られた。また、「通知が定期的に欲しい」というような、昨年度との支援策の違いを指摘していると考え得る意見も見られた。

4.3 今後の学習支援の方針

今年度実施分の鍛錬道場に対する事後アンケート結果をまとめたことで実際に参加者が思うことを知る機会を得ることができた。次年度以降、鍛錬道場実施期間中の支援策として取り入れることができるものとしては、まずは、初年度である昨年度で懸念を示していた、取り組み速度の目安設定の有無についてである。吉川他（2022）では、目安設定が自律的な学習を抑制し得る要因になるのではないかと危惧していた。しかしながら、昨年度に引き続き、今年度も継続して提示していた目安に対して、鍛錬道場の「良かった点」として挙げられていたことは、そのような懸念を払拭できる一因となりうる可能性を示唆しているといえる。たとえば次年度以降の事後アンケートに、目安設定の是非について直接問う項目を設けることで、より参加者の声を反映した運営が可能になるかもしれない。

次に、継続学習を実現させるための支援についてである。繰り返しになるが、

本活動は、授業外で行う自由参加型の活動であるため、実際に学習するか否かは参加者一人ひとりの動機によることは致し方ない。今年度においては、表 6 が示す通り、継続的に取り組めたと回答する参加者は、前後期道場で平均して約 40%であり、過半数は取り組めなかったと回答している。記述アンケートの回答をみても、鍛錬道場の「悪かった点」として、自責の念を込めているのか、就職活動や、授業の課題に追われていたという理由から、継続して取り組むことができなかったという声も複数挙げられていた。それにもかかわらず、前後期の参加者において約 8 割のアンケート回答者が継続参加の意思を示す結果が得られている。これらが意味することとして考えられるのは、彼らが継続的な学習を維持し続けるには、どのような働きかけが有効かについてはまだ定かではないものの、外部からの働きかけをしていくことが必要であるかもしれない、ということである。本活動に参加することで、筆者ら教員が設定する目安を頼りにするか否かは別として、参加者自身が学習計画を立て、それに基づいて継続的に学習に取り組み、結果的に自律的な英語学習者になる、というのが教員側の理想ではあるものの、実際には本活動は、自律的な英語学習者になることができるような足場掛け的な存在として機能しているのかもしれない。言い換えると、授業というような、ある一定の拘束状態の中で取り組む学習とは異なり、一人ひとりが掲げる英語力に対する目標達成に向けて、各自が自由に取り組む環境下における学習に対しては、何らかの外部サポートを受けながら継続学習をしていく中で、付随的に自律性が備わっていくものではないか、ということである。そのように考えると、初年度で取り入れた毎週のメール配信は継続学習には有効であったのかもしれない。なぜなら、メールには、その週に取り組む目安の学習量が教材ごとに示されていると同時に、教員からの応援メッセージも含んでいたためである。そのため、次年度以降は、取り組み速度の目安に加えて、週ごとのメッセージ配信を取り入れて、参加者の取り組み状況を再検討し、さらなる改善策を探っていきたいと思う。

4.4 本活動の効果検証

前節までで、前後期鍛錬道場における参加者の取り組み状況を報告した。本節では、学習開始前後に実施した TOEIC IP テストの結果の比較を行い、本活動の効果について検討していく。検討にあたって使用するスコアは、2 章で詳説した計 3 回の TOEIC IP テスト（参照：表 1）で得られたスコアである。

まず、表 7 は第 1 回・第 2 回実施分で得られた TOEIC IP スコアの記述統計を示す。前期道場の参加者における学習効果を検証する上での対象データとなるものである。表 8 は第 2 回・第 3 回実施分で得られた TOEIC IP スコアの記述統計であり、後期道場の参加者における学習効果を検証する上での対象データとなるものである。なお、表 7 の「第 1 回実施分」、および表 8 の「第 2 回実施分」には、鍛錬参加募集時に実施した Forms 上のアンケートにて、各回の TOEIC IP テスト未受験者に対して回答を求めた過去 2 年以内の TOEIC (IP) スコアデータも含んでおり(表 7・8 の各項目の下端の丸括弧内の数値が該当)、学習開始直前の英語力を示すデータのみで構成されているものではない。これは、鍛錬道場の参加者全員が第 1～3 回の TOEIC IP テストへ受験しているわけではないため、効果検証の上で必要となるデータの僅少性を解消する手段である。学習開始前においてのみ直近ではないデータも含め、後続の分析対象データとして扱うこととした。

各表をみると、両道場においても、学習開始前に実施した TOEIC IP の受験者数が終了後に実施したものに比べて約 2 倍多いことがわかる。終了後に実施する TOEIC IP テストの通知案内の際には、「学習目安の期間が終わりに近づいていますので、積極的に受験し、今学期の学習効果を実感してください。」という文言を用いて受験を促していた。しかしながら、図 11～図 14、および、事後アンケート結果(参照：表 6)を踏まえると、継続して学習していた学生は限られており、学習効果を実感できるほど学習に取り組んでいなかったため、受験の必要性や重要性を感じる学生が多くなかったのかもしれない。あるいは、学習開始前に受験をしたため、4 か月弱程度のスパンで、再受験するという必要性を感じる学生や、金銭的な負担から受験する意思に至る学生は少なかったのかもしれない。いずれにせよ、学習終了後の TOEIC IP テストの受験者数が半減する結果は、効果を測定するという観点からはあまり好ましくない。なぜなら、効果測定が十分に行えない状態で本活動を継続することは、客観的な立場から捉えると、活動そのものの意義を見出すことが難しいためである。参加を募る際にも、客観的な裏付けデータや事実に基づいた募集告知が行えると参加動機につながることも大いに考えられるため、学習直前・直後に実施するテスト等で比較を行い、データを蓄積することが重要であると考えられる。

初年度においても、学習開始前後の両方の TOEIC IP テストを受験した参加者は少なかったものの(18 名)、学習終了後の IP テストの平均点は、開始前の

表7. 第1回・第2回TOEIC IPを受験した前期道場参加者の記述統計

学年	第1回実施分			第2回実施分		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
学部1年	0 (2)	- (552.50)	- (3.54)	1	620.00	-
学部2年	6 (18)	645.67 (658.61)	95.44 (113.04)	2	630.00	155.56
学部3年	10 (38)	605.50 (583.29)	137.39 (110.00)	4	577.50	155.38
学部4年	19 (41)	561.32 (630.98)	115.34 (122.08)	3	660.00	101.49
博士前期課程	13 (52)	643.46 (620.10)	68.29 (138.12)	17	640.59	131.62
博士後期課程	1 (4)	330.00 (630.00)	- (98.06)	0	-	-
受験者数	49 (155)	557.19 (612.58)	35.30 (38.17)	27	625.62	25.61

注)「第1回実施分」の各項目の上段は各回のTOEIC IPスコアデータを、下段の丸括弧内は、参加者が報告したスコアデータを示す。

表8. 第2回・第3回TOEIC IPを受験した後期道場参加者の記述統計

学年	第2回実施分			第3回実施分		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
学部1年	2 (7)	700 (624.29)	113.14 (181.28)	0	-	-
学部2年	- (11)	- (610.73)	- (120.70)	-	-	-
学部3年	7 (42)	551.43 (575.24)	112.35 (91.84)	4	566.25	39.45
学部4年	5 (20)	621.00 (628.90)	108.77 (141.75)	1	635.00	-
博士前期課程	4 (18)	712.5- (702.22)	35.24 (95.20)	0	-	-
博士後期課程	1 (2)	720.00 (482.50)	- (229.81)	0	-	-
受験者数	19 (100)	648.11 (603.98)	38.14 (72.54)	5	600.63	39.45

注)「第2回実施分」の各項目の上段は各回のTOEIC IPスコアデータを、下段の丸括弧内は、参加者が報告したスコアデータを示す。

ものと比べて有意に高い結果が得られた。参加者の自由意思による受験であるシステムである以上は、サンプル数の僅少性の問題は根本的に解決することは非常に困難ではあるものの、少なくとも、学習効果の継続検証が続ける必要性を述べていた（吉川他、2022）。

今年度においても、TOEIC IP テストへの受験は、参加者の自由意思であったため、開始前後の両方の IP テストに受験した参加者数は、データ僅少性の問題は依然として残る結果であった。具体的には、前期道場においては 10 名（学習開始前と学習目安期間終了後の TOEIC IP スコア平均は、それぞれ 615.00 [$SD = 117.76$]、665.00 [$SD = 137.86$]）、後期道場においては 1 名であった（学習開始前と学習目安期間終了後の TOEIC IP スコアは、それぞれ 650 と 635）。そのため、一つの解決案として分析対象として含めた、鍛錬学習開始前に TOEIC (IP) スコア結果を自己報告し、鍛錬学習後に IP テストを受験した参加者数を集計すると、前期道場においては 9 名（学習開始前と学習目安期間終了後の TOEIC IP スコア平均は、それぞれ 578.89 [$SD = 107.73$]、649.44 [$SD = 138.78$]）、後期道場においては 2 名（学習開始前と学習目安期間終了後の TOEIC IP スコア平均は、それぞれ 570.00 [$SD = 42.43$]、542.50 [$SD = 24.75$]) であった。上記いずれかのスコアを有した参加者（学習開始前に IP を受験した者と、スコアを自己報告した者）は、前期道場においては 19 名（学習開始前と学習目安期間終了後の TOEIC IP スコア平均は、それぞれ 597.89 [$SD = 111.51$]、657.63 [$SD = 134.63$]）であり、後期道場においては 3 名（学習開始前と学習目安期間終了後の TOEIC IP スコア平均は、それぞれ 539.62 [$SD = 119.22$]、635.77 [$SD = 123.02$]）であった。上記したデータはいずれも、オンライン教材に取り組んだ者のみを対象とし、未取り組み者のデータは含まなかった。

学習開始前と終了後に収集した TOEIC スコアに有意差があるか否かを検証するため、前期道場のデータに対して Brunner-Munzel 検定を行ったところ、いずれのデータセットにおいて有意差は見られなかった ($p > .05$)。前年度と同様、少人数での比較ではあったものの、前年度とは異なり、有意差は得られなかった。一つの可能性としては、前年度とは異なる統計手法を用いたことである。その他の考察として挙げられるのは、今年度は、自己報告のスコアデータを分析対象に含めた点である。これについては議論の余地があるといえよう。というのも、自己報告のスコアを求めた際の指示は、「過去 2 年以内の TOEIC

スコアを持っていれば最も直近のスコアを記入してください」であったが、この場合だと、過去2年であればいつのスコアでもよく、スコア取得時期のばらつきを考慮しきれていないためである。また、今回の分析に使用した自己報告データは、分析対象データとして使用するという想定はなく、学習コースの振り分けの際に必要なために回答を求めている。もし自己報告データも、効果測定の際にデータとして使用するのであれば、たとえば直近3カ月前までのデータのみ限定する、などの制限を加える必要があろう。後期道場においては、データ数が著しく少なかったため、分析自体が行えなかった。これらの点を踏まえ、今後は、各回の TOEIC 受験者数を確保すること、あるいは代替となる何らかの他のテストを実施し、それに基づいた効果検証が行えるような環境を整えていくことが求められよう。

5. おわりに

本稿では、名古屋工業大学の英語科目集団が前年度に引き続き、2022年度において実施した、授業外での継続的な英語学習支援に関する報告を行いつつ、実務的な課題の整理とその解決案を検討した。今年度は、鍛錬道場終了時に実施したアンケート結果を集計したことで、鍛錬道場に参加した学生の意見を整理することができた、そしてその過程で、今後の学習期間中の支援策に対して、暫定的ではあるが、方向性を得ることができた。我々の活動の安定した継続に向けて重要な第一歩であるといえよう。本活動そのものを客観的に評価する体制作りについては、今後も検討を重ねていく必要があることを再認識した。

注

(1) 本稿で「第1回実施分」とする TOEIC IP テストは、吉川他(2022)においては、「第3回実施分」にあたるものである。

参考文献

吉川 りさ・横越 梓・石川 有香 (2022). 本学における継続的英語学習支援の活動報告 *New Directions*, 40, 47-66.